

■講演

「オリンピックとアートー古代および近現代を通してー」

真田 久 (筑波大学)

《真田久先生のプロフィール》

1979年筑波大学体育専門学群卒，1981年同大学院体育研究科修了。現在，筑波大学体育系教授。2012年より同体育専門学群長。博士(人間科学，早稲田大学)。古代および近現代のオリンピック競技会や嘉納治五郎に関する歴史人類学的研究に従事。2010年設立のIOC公認「筑波大学オリンピック教育プラットフォーム」事務局長として，附属学校11校とともにオリンピック・パラリンピック教育の展開に携わる。2014年に政府事業としてスタートした“Sport for Tomorrow”の大学院学位プログラム，つくば国際スポーツアカデミー(TIAS)のアカデミー長も務める。主な著書として，『19世紀のオリンピア競技祭』(明和出版，2012年)。共著として *Olympic Education* (Routledge, 2017)，『現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか』(ミネルヴァ書房，2014年)，『日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史』(2012年) 他。

本日は舞踊学会の第22回定例研究会にお招きいただきましてありがとうございます。「オリンピックとアート」というテーマで，古代それから近現代の歴史を踏まえて，オリンピックとアートとの関わりについてお話したいと思います。

まず，オリンピック憲章の中で文化や芸術がどのように位置付けられているのかということ，次に，古代のオリンピックの中で文化や芸術というものがどのようにスポーツと関係を持っていたかということ，更には，今日のオリンピック競技会(パラリンピックも含めてですが)では，必ず文化プログラムを行わなければならないということもありまして，その文化プログラムについても紹介させていただきたいと思います。

●オリンピックにおける文化や芸術の位置づけ

この写真は，オリンピアの博物館に展示されているニケの像です。これは，オリンピアの神殿の中に飾られていた像です。ニケと言いますと，パリのルーブル博物館にあるニケが有名ですが，こちらもオリンピアの場所にあったということで優雅な姿と美しい身体美を魅せたものではないかと思っています。これは勝利を収めようとする，ま

さにアスリートを表している像ですね。2004年のアテネオリンピックからこのオリンピアのニケ像がメダルのデザインになっています。

さて，オリンピック憲章の一番新しいものが2016年版になるのですが，その根本原則，最初に書かれているルールはIOC(国際オリンピック委員会)が定めたもので，オリンピック競技会あるいはオリンピックムーブメントの様々な規定をしているルール・憲章であります。

その第一条が「オリンピズム」。これはオリンピックの理念でもあります，「身体と文化を発展させて，最終的に社会に発展・世界に貢献していく」という考え方で，これは「スポーツを文化教育とし，生き方の創造を探求するものである」と規定をされております。

このように，オリンピック憲章の最初の根本原則である第一条には，「スポーツは文化や教育と一緒に存在しなければいけない」ということを述べているのです。それから，この根本原則などにIOCの使命と役割が書かれています。オリンピック委員会の役割の1つに，「スポーツと文化及び教育を融合させる活動をし，支援する」とありまして，IOCは，「スポーツは単にスポーツだけではなくて，やはり文化と教育とともに発展させていくように」と言っております。それを受けて，各国のオリンピック委員会，日本のオリンピック委員会(JOC)なども「スポーツとオリンピズムの分野において文化と芸術の奨励を受ける」となっており，日本オリンピック委員会は文化と芸術をきちんと奨励することをしていかなければならないとなっているわけです。これがオリンピック憲章で定められている内容であり，オリンピックにおいてスポーツと文化，芸術，教育とが密接な関わりを持っているということでもあります。

文化プログラムについては，憲章の第39条に書いてあります。OC・OG，これは組織委員会の略ですが，「組織委員会は少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間，文化プログラムを催すものとする。文化プログラムは事前にIOCの承認を得なければならない」ということが書かれています。ということはオリンピック競技団体の組織委員会は必ず文化プログラムを開催都市あるいは開催国で行わなければならないということなのです。

最近では，この文化プログラムは，カルチュラ

ルオリンピック・文化オリンピックと名付けられ、それは4年間の期間を指し、どの大会においても、前の大会が終わってから次の大会が終わるまでの4年間すべてで文化プログラムを行おうというわけです。東京の場合は、リオのパラリンピックが終わり、昨年の秋から文化プログラムを始めているということです。ですから、スポーツの大会は2週間ちょっとで終わってしまうのですが、文化プログラムは4年間行われているということです。

以上が、今日のオリンピック憲章における文化や芸術の位置づけということになります。

●古代オリンピックにおけるスポーツとアート

では、なぜオリンピック憲章に文化や芸術との融合を示しているのかといえば、これは古代のオリンピックに遡るわけです。古代のオリンピックは、文化や芸術全般に極めて関わりが深かったといえるのです。今日の近代オリンピックは、もともとは古代オリンピックの復興でありました。紀元前の時代ギリシャで行われていたオリンピックを今日の社会に復活させようという考えから始められたものです。

では、古代のオリンピックはどのようなものだったのか。まず期間が非常に長かったのが最大の特徴です。紀元前776年（これは今日歴史学的に決められているのですが）が第一回オリンピックになります。それが、紀元後の393年、4世紀に一度記録上終了した年となっております。その後も約1200年近くやっていました。驚異的な長さですね。これほどの長さを、日本の歴史に例えると、奈良から京都に都が移る平安京から今日近くまで、だいたい1200年間、オリンピアでスポーツの祭典、文化の祭典を行っていたというわけです。大変な長さですね。そして、戦争による中止などはありません。これはギリシャ全体に取り決められていて、オリンピアで祭典が行われる時は武器を置いて迎えなければいけない。これを破ると、様々な村八分的な処罰を受けてしまうんですね。

ここにゼウスの像がありますが、これは高さが十数メートルの像で、奈良の大仏のような像でして、古代のオリンピックはこのゼウスを祭る祭典でもあり、宗教的な意味もありました。十数メートルのゼウスの像を、古代人は世界の七不思議の一つにしていました。一生に一度はこれを見に行きたいと思う人は多かったわけで、4年に一度見るチャンスがあった。いってみれば、これは巡礼でもあったのです。

古代オリンピアの競技場がこちらです。ここは周りには何もない場に設けられ、200メートル近い走路があって、ここを直線をこちらから向こうへ走ったり、行って帰ってくる往復競争があった

り、さらに10往復ぐらいするものもありました。長距離走に近いものから、レスリング、ボクシング、それから、やり投げ、円盤投げなどを含める総合競技も行われていました。

ここでクイズを出したいと思います。初日の一番最初に行われた競技は何だったのでしょうか。1番-吹奏競技、2番-フェンシング、3番-やり投げ。さて三つの中で何でしょうか。

実はこれは、笛やラッパなどです。正解は、吹奏競技です。そして二番目に行われたのは、人のアナウンスなのです。この二つは、音や声をいかに遠くまで綺麗に届かせることができるかを競うんですね。これで優勝をすればオリーブを授与され、勝利者リストにもきちんと書かれます。では、なぜ吹奏競技、人のアナウンスを最初の競技にしたのでしょうか。それは、古代にはスピーカーなどがないので、人を呼ぶ・コールするときには活用する。また、選手を呼ぶときに笛を吹いて歓迎するという役を決めるために競技が開かれたのです。ここから芸術競技にも発展していくのです。スポーツと芸術が密接な関係にあることを象徴していますね。

●アスリートたちが求めた身体美とは？

次に、これは古代の更衣室です。更衣室にはこのような小さな瓶が吊り下げられています。これは何でしょうか。ワインか、オリーブオイルか、シャンプーか…。実はこれ、オリーブオイルなんですね。ギリシャのアスリートは、まず「鍛え上げた肉体を美しく魅せたい」という思いを強く持っていました。そのようなところに芸術的な人が集まってきたわけです。このような競技会場には、アスリートを対象とした芸術のジャンルとして、絵描きや彫刻家や詩人たちがたくさん集まってきました。その中で、鍛え上げた肉体を美しく魅せていく。それがオリーブオイルの使用にも繋がってくるのです。もう一方では、ギリシャは乾燥した場所であり、そこで裸で競技をしていたので肌が荒れてしまいます。それを防ぐためにオリーブオイルを体に塗っていたという歴史があります。美しい肉体を魅せるため、肌を守るためにオリーブオイルを使用していたんですね。

こうしたことは、こういう壺絵にも描かれていて、これはアスリートたちがオリーブオイルを垂らして塗っている場面で、彼らは理想的な身体美を追求していくことにも繋がっていくのです。

また、これはやり投げのアスリート像です。ローマ時代の後期ですが、八頭身という鍛え上げられた美しい身体を表現しています。単に力が強いだけでなく、気品も持ち合わされていることが美しさの理想となっていました。

これらは芸術家たちによる追求も大きかったの

ですね。古代の建築も極めてアートとしても意味がありました。これは有名なアテネのパルテノン神殿で、聖火リレーのゴールにもなっていました。アテネの町から丘に向かって走っていくと、そういう光景が繰り広げられた神殿でした。また、これはイタリアのシチリア島にあるパレルモという場所で、ギリシャ時代の劇場ですね。ここで彼らは古代劇を観ていたのですが、見てわかるように山があります。またこの中に綺麗な海もあります。いわゆる、日本でいう借景ですね、借景をしながら、古代の劇を楽しんだわけで、非常に優雅な生活を送っていたのです。

そして、この横には劇場、ローマにはお風呂、さらには競技場、競技の練習会場、また図書館が建てられていたのです。このように、日常生活の中にもスポーツと文化が融合していたといえます。

彼らが理想としていた身体美は、カロカガティアと言われていました。そして、身体的な美しさや高潔さや品格を備えた人間が最も優れた美しい人間であると言われていたのです。それをモチーフにした円盤投げのアスリート像、そして、先ほどもでてきたやり投げのアスリート像ですね。これらの「力強さと品格を持ち合わせた者が理想である」と、芸術家たち、または哲学者たちによって推奨されていきました。例えば、ソクラテスはこんなことを言っています。青白い顔をして、あまり鍛え上げられていない体の若者を見ては語りかけるのですが、「自分の身体の美と力を一度も見ずに老いてしまうことほど不名誉なことはない。若い時は、鍛えれば身体の美と力を見ることが出来るのだ」と言っていました。彼はレスリングをやっていましたからね。スポーツと文化人は近い存在であったのです。

●古代の舞踊とオリンピック

そして、古代の舞踊について、プラトンはこんなことを述べています。「リズムやハーモニーを持っているのは人間だけなのだ」、つまり、そこが人間と動物を分けるものだと言っているんです。さらに、「リズムやハーモニー、つまりこれは、踊り歌うという感性は遺伝なのだ。これは神々に近い存在であることの証なのだ」と述べています。そして、コロスという、広いアリーナで1人が歌を歌ったり、踊ったりするのをサポートするという人々の集団がいました。これは後にコーラスになるのですが、「このコロスの中でもよく歌える人、よく踊れる人は教養のある人だ」と述べられています。これは古代の舞踊家にあたることなのかなと思います。

さらに、スポーツの指導者・体育教師は笛を奏でながらレスリング、ボクシング、やり投げ、幅跳びなどを指導していたんですね。最初に行われ

た競技であったと先ほど述べましたが、これは実はリズムやハーモニーを見つける重要な科目であり、教材であったといえます。これは舞踊、ダンスを踊っているものですが、男の人が踊っている様子で、求愛しているダンスですね。

また、歌の競技もありました。これはフルートを奏でて、歌を歌っていたということですね。これは、練習風景ですが、広場が真ん中にあり、ここでレスリングやボクシングをしていた風景で、その周りで笛を吹いています。このように、リズムを取りながら競技の練習を行っていた。これは幅跳びの練習の風景で、その周りにもやはり笛を吹いている人が居ますし、こちらはボクシングの絵ですが、ボクシングをやっている周りでも笛を吹いています。そして、この壺絵を見ていてふと思ったのですが、これは踊っているように見えますよね。ボクシングの練習で音楽に乗りながら踊っていたのではないかと。つまりこれは、もしかしたら舞踊なんじゃないかと、そんな気もするわけです。こんな風にスポーツと芸術は密接な関係があったと思うと大変興味深いですね。

それから古代オリンピックでは詩人も活躍しました。実は、スポーツ詩人という人々がいて、スポーツの詩を作ってそれを職業として成り立たせていたんですね。優勝した人に詩を作ってあげてお金を貰っていた、そういう職業です。スポーツ詩人、今でいうスポーツライターでしょうか。そこで代表的な人がピンダロスという紀元前5世紀の人物ですが、彼はスポーツ詩人という職業で活躍しました。そして、オリンピアの競技祭のことを讃えました。この人の詩の一節は2004年のアテネオリンピックのメダルの裏側に刻まれています。

このように古代ではスポーツとアートが非常に密接であったこと、またリズムやハーモニーが教養として与えられていたこと、身体的な文化とリズムとハーモニーの関係性も非常に重要であったのです。それから文化人ですね、芸術家や哲学者、詩人などがスポーツそのものを育成していた、こういう面があると言われていたんですね。

●古代から近現代へ、変容するオリンピック

こういう古代の競技を近現代に持ってきたというのもありまして、今日のオリンピックに繋がる実は手前のオリンピックがあり、ギリシャ独自で行われたオリンピックがありました。これがアテネで4回ほど行われていました。そこでは、古代の競技を行うのと同時に、やはり芸術部門の競技をやるということになり、これは彫刻、絵画、設計図ですね。また、音楽での競技も行われていました。これは海外のギリシャ人も参加していて、非常ににぎわっていました。そして、この時のギリシャのオリンピックの目的として産業の発展、

産業製品の競争も、近代的なオリンピックの特徴ですね。そして、身体の活躍、それから知性の発展。これはミューズという古代の芸術文化の女神たちですね。ですからこの芸術競技になっているわけです。これを見ると第一回の近代オリンピックのアテネの大会でも芸術競技が計画をされ、行われていたということがわかります。音楽競技を行うプログラムもあり、色んな楽団を呼んでコンクールを行っていました。また、閉会式には、優勝者が詩の朗読を行い、メダルとオリーブの枝も授与されたのです。それから10年後、アテネで1906年、中間オリンピックが行われました。ここでは、古代劇の上演が行われています。競技場で、古代ギリシャで行われていた劇を上演したんですね。このようなスポーツの競技場でこういう文化の再演も行なったということです。

そして、近代オリンピックですね、クーベルタンも芸術競技を行うべきだと提唱し、ギリシャと同様に絵画や彫刻などを競技として行いました。これで優勝した際は金メダル、そして銅メダルまで授与したのです。また、日本でも日本画家の藤田隆治が1936年ベルリンオリンピックの絵画部門で銅メダルを獲得しています。オリンピックのメダリストの中に入っているんですね。そして数々の著名な芸術家たちがオリンピックの芸術競技に参加しています。

それから、あとはアマチュアリズムとの関係があって、アスリートの方は当時アマチュアなのに、芸術家たちはプロということもあって、それをどうするかという問題、それと芸術で順位を付けるのは本当に難しいということもあって芸術競技はなくなってしまいました、そのかわりに芸術展示を行おうということになりました。さらにそれを文化プログラムとして色んなジャンルの文化、その国だけではなくて色んな国の文化を紹介し合うような場にしようということになりました。同時に、これらも4年間やろうと、文化オリンピックという名称が付けられました。オリンピックが終わったら、次のオリンピックまでの期間に文化プログラムを行っていくということです。

●現在のオリンピックと文化プログラム

そこで、1964年東京大会の時は、日本の文化を主に紹介するというので、こういう近代美術、それからスポーツに関係する写真、スポーツ郵便切手、それから歌舞伎、人形劇、民俗舞踊などがすでに行われております。歌舞伎にはかなりの外国人も来て観られたということです。

そして、アテネ大会の2004年の時の文化オリンピックで、実は、蜷川幸雄演出の野村萬斎が演じる『オイディプス王』がアテネの劇場、古代の音楽堂で上演されたんですね。これは非常にユ

ニークなプログラムだと思うんですが、この古代の音楽堂で、日本語で上演したのです。観客のほとんどはギリシャ人またはツーリストで、ほとんどがヨーロッパ人相手に日本語で、しかも日本的な雰囲気で行っているんですね。終わった後は、スタンディングオベーションがあり、非常に評価が高かった内容でした。『オイディプス王』というとギリシャ人なら誰でも知っている物語だと思うんですが、日本語でやってもその内容が非常によく理解できたわけです。例えば、これを東京で例えますと、歌舞伎をニューヨークの舞踊の劇団の人達が英語でやる、衣装も洋風なものでやってもらう。そのような発想になっているかもしれません。これは、まさにオリンピックだからこそできる文化プログラムではないかと、象徴的なものだったと、このような内容を行えるのが、オリンピックの文化プログラムなのかもしれません。

そして、2012年ロンドン大会の文化オリンピックになりまして、「ロンドン2012フェスティバル」と銘打って、1万2千人の文化人で展開・構成され、4年間で音楽・演劇・ダンス・映画・展示などには1万8千件の文化プログラムを1800万人が鑑賞したと言われております。このような文化がロンドンで見事な文化オリンピックを魅せたのです。

●2020年東京大会に向けて

それらを踏まえて東京2020の文化プログラムですね。これは現在企画プログラムとして行われています。主に自治体等が中心になって行われていますが、これをもっと広げようと今行動しているところです。ロンドンのように「東京2020フェスティバル」をやろうということで、2020年の4月、聖火リレーが始まる頃からパラリンピック閉会式まで、ここに様々な文化、開催国の日本の紹介、多様性を祝うような内容、そして、震災復興を盛り込んでいこうと考えられています。

昨年、IOCのバッハ会長が筑波大学のこの教室に来られて30分間のスピーチを行いました。その時に、「新しいオリンピックムーブメントは具体的には東京から始まるんだ。この2020年は、変化の年なのだ」と言われていました。その中で、スポーツと文化の繋がりをさらに強めていくと明確に言われています。そういうことを考えて、東京2020に私たちも向かっていく必要があると思うわけでありまして。

以上で、講演を終わりにさせていただきます。